

病虫害発生予察情報(10月予報)

令和8年9月29日

静岡県病虫害防除所長

1 予報概況

作物名	病虫害名	予報 (10月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	トビイロウンカ	発生量：少	9月上中旬発生量：少(発生なし) (－) 9月の成虫誘殺数：少(誘殺なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
温州 みかん	黒点病	発生量：多 (発病度 2.7)	9月上中旬発生量：やや多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	かいよう病	発生量：やや多 (発病度(果) 0.1)	9月上中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ミカンハダニ	発生量：多 (寄生葉率 1.5%)	9月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
中晩柑類	かいよう病	発生量：やや少 (発病度(果) 0.7)	9月上中旬発生量(果)：少 (－) 9月上中旬発生量(葉)：やや多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
果樹全般	果樹カメムシ類	飛来数：多	予察灯誘殺数：多 (＋) フェロモントラップ誘殺数：多 (＋) ヒノキ着果量：多 (＋) ヒノキ寄生数：多 (＋) ヒノキ球果吸汁痕数：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
茶	チャハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.4 頭/1.25m ²)	9月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.3 頭/1.25m ²)	9月上中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	カンザワハダニ	発生量：やや少 (寄生葉率1.1%)	9月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)

作物名	病害虫名	予報 (10月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病・ すすかび病	発 生 量：並 (発病株率 11.6%)	9月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	黄化葉巻病	発 生 量 黄化葉巻病：少 (発病株率 1.0%)	9月中旬発生量：少(発生なし) (－) 9月中旬のコナジラミ類発生量：少 (－) 気象予報：気 温：高い (＋)
	タバコ コナジラミ	コナジラミ類：やや少 (寄生株率 13.3%)	9月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気 温：高い (＋)
だいこん	コナガ	発 生 量：やや多 (寄生株率 0.1%)	9月トラップ [※] 捕獲数：並 (±) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
ねぎ (白ねぎ)	黒斑病・葉枯病	発 生 量：やや多 (発病株率5.3%)	9月中旬発生量：多 (＋) ネギアザミウマ発生量：少 (－) 気象予報：気 温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ネギアザミウマ	発 生 量：やや少 (寄生株率10.0%)	9月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	シロイチモジ ヨトウ	発 生 量：多 (寄生株率1.6%)	9月中旬発生量：多 (＋) フェロモントラップ誘殺数：多 (＋) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ネギハモグリバエ	発 生 量：やや少 (被害株率46.9%)	9月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
いちご	炭疽病	発 生 量：やや少 (発病株率 1.9%)	8月上中旬発生量：少 (－) 9 月 発 生 量：やや少～やや多 (－～＋) 気象予報：気 温：高い (＋)
	ハダニ類	発 生 量：多 (寄生株率12.4%)	8月上中旬発生量：多 (＋) 9 月 発 生 量：並 (±) 気象予報：気 温：高い (＋)
作物全般	ハスモンヨトウ	発 生 量：やや多	9月トラップ [※] 誘殺数：やや少～多 (－～＋) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	オオタバコガ	発 生 量：多	9月トラップ誘殺数：並～多 (±～＋) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の 1 か月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。



静岡県病害虫防除所 HP

[https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimu
sho/1058658/boujo/index.html](https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimu sho/1058658/boujo/index.html)



静岡県総合防除計画 HP

[https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/nogyo/no
uyaku/1003316/1062325.html](https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/nogyo/no uyaku/1003316/1062325.html)

2 予報の根拠と防除対策

【稲】

＜生育の概況等＞

巡回時（調査期間：9月10日～15日）の生育は普通期栽培が概ね乳熟期～成熟期であった。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、本種の寄生は確認されなかった（平年0.6頭／株）。
- ・県内4か所の予察灯におけるトビイロウンカの誘殺は確認されなかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、増殖が助長される気象条件である。

防除対策

- ・予察灯の誘殺数データは静岡県病虫害防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で提供している。
- ・気温が高い場合に急増することがある。被害や成幼虫の寄生を確認した場合は薬剤防除を実施する。

【温州みかん】

＜生育の概況等＞

病虫害防除員からの報告によると、生育は平年並～数日早い地域が多い。果実の肥大は産地によりばらついており、やや悪い～やや良い。

●黒点病

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、平均発病度は2.7（平年2.0）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・20～27℃の水滴中で孢子が発芽し、葉や果実に感染して黒点が出来る。降雨日の最低気温が22℃以上になると容易に感染する。
- ・樹冠内部の枯枝や剪定枝、切株などの伝染源は除去し、園内や周囲に放置しない。
- ・多雨は発生を助長するため、秋雨による果実への感染に注意する。
- ・防除実施日以降の累積降水量が250～300mm、または防除実施日から25～30日経過した時点が次の防除実施の目安となる。アメダスなどの気象データを確認し、栽培地域の累積降水量が増えた場合は防除を早めて実施する。
- ・後期感染を防止するため、降雨の前など適宜防除を実施する。ただし、収穫前日数に注意する。

●かいよう病

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、果実の発病度は0.2（平年0.1）、葉の発病度は0.3（平年0.3）と平年並だった。
- ・先月までかいよう病として計測していた微小なかいよう症状（「[令和8年度技術情報第2号（温州](#)

みかん、中晩柑類 かいよう病」) について、かいよう病菌 (*Xanthomonas citri* subsp. *citri*) による症状ではないことが明らかになったため、今月の巡回調査から計測対象外とした。

- ・ 1 か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病は風雨により伝染する。台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。台風の接近が増える時期となるため、気象情報と園地の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防散布に重点を置く。
- ・ 台風により感染が拡大した可能性がある。園地の発生状況に注意し、発病枝は伝染源となるため除去する。発病した夏秋枝は特に除去する。
- ・ ミカンハモグリガの被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行い、被害枝は除去する。
- ・ 風ずれなどの傷口から病原菌が侵入するため、防風垣や防風網の整備など防風対策をする。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 9 月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は 3.8% (平年 1.7%) と平年より多かった。地域別では、東部で 0.3% (平年 0.7)、中部で 1.4% (平年 2.8)、西部で 9.6% (平年 1.7) と、西部での発生が多かった。
- ・ 1 か月予報によると、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 着色期以降に発生すると果実が着色不良となり商品価値が低下するため、発生がみられた場合は薬剤防除を行う。

<その他の病害虫>

●カイガラムシ類 (マルカイガラムシ類、ヤノネカイガラムシ、イセリヤカイガラムシ、ロウムシ類、コナカイガラムシ類)

- ・ 9 月上中旬の巡回調査では、ナシマルカイガラムシの平均寄生果率は 1.5% (平年 0.2%) と平年より多かった。地域別では、東部での寄生は認められず (平年 0.01)、中部で 1.8% (平年 0.2)、西部で 2.8% (平年 0.3) と、中部・西部での発生が多かった。
- ・ 近年における温州みかん巡回調査では、各種カイガラムシの発生が平年より多い状況が続いている (「令和 7 年度技術情報第 4 号 (かんきつ カイガラムシ類)」 参照)。
- ・ 近年、マルカイガラムシ類 (アカマルカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ) の発生が増加しているとの報告が、東部や西部の病害虫防除員から寄せられている。
- ・ 剪定によりカイガラムシ類の寄生枝を除去するとともに、散布薬剤が届きやすい樹体に仕立てる。
- ・ 発生園では、越冬成虫に対する冬季のマシン油乳剤散布を徹底し、初期密度を下げる。
- ・ カイガラムシ類幼虫に対する薬剤散布は、発育ステージが比較的そろっている第 1 世代の防除適期に実施する。なお、第 1 世代幼虫の防除適期は、カイガラムシ類の発生種により異なり、来年 6 ~

7月である。

- ・詳細な防除適期や防除対策については「[令和7年度技術情報第4号（かんきつ カイガラムシ類）](#)」も参照する。

●青かび・緑かび病

- ・病原菌の生育適温は25～27℃である。土壌中に胞子の形で存在し、土ぼこりとともに果実表面に付着、傷口から感染する。台風などの強風雨は胞子が跳ね上がるため、樹上での発生を助長する。
- ・樹上果、摘果果実ともに発病果を放置すると胞子形成が進み発生が増加していく。園地の見回りを行い、発病果は発見し次第速やかに園地外に持ち出して処分する。
- ・収穫時のハサミ傷や収穫コンテナに混入した枯れ枝や小石などによる傷は、感染を助長し貯蔵中の発病が増加する。果実の運搬や選果が手荒で果皮に傷が付く場合でも同様であるため、丁寧な収穫作業を行う。
- ・果実が過熟にならないよう適期に収穫し、雨の日や雨の翌日など果実に水滴が残っているようなときには収穫を避ける。

●褐色腐敗病

- ・病原菌は土壌中に存在し、雨による泥のはね上がりなどで遊走子が果実に侵入する。
- ・主な伝染は水媒介であり、連続降雨や強風雨によって感染が著しく助長されるため降雨前に防除を行う。
- ・感染成立時間は25℃で1時間と極めて短く、感染が拡大しやすいため、過去に発生した園地では特に注意が必要である。
- ・ほ場の排水溝の整備、通風を良くするなど地表面の乾燥に努める。土壌からの雨滴の跳ね返りを防止するためにマルチ栽培や樹冠下に敷ワラ、敷草を行う、果実を地表面から離すために結果枝のつり上げや下枝に支柱を立てるなど耕種的防除に努める。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、果実の発病度は0.4（平年0.7）と平年より少なく、葉の発病度は1.2（平年0.9）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・本病は風雨により伝染する。台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。台風の接近が増える時期となるため、気象情報と園地の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防散布に重点を置く。
- ・台風により感染が拡大した可能性がある。園地の発生状況に注意し、発病枝は伝染源となるため除去する。発病した夏秋枝は特に除去する。
- ・ミカンハモグリガの被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行い、被害枝は除去す

る。

- ・風ずれなどの傷口から病原菌が侵入するため、防風垣や防風網の整備など防風対策をする。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・県内4か所の予察灯における9月1日～20日の合計誘殺数の平均は、19512頭（平成26年960頭、平成27年比20.3倍）と平成26年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが8644頭（平成26年606頭）、ツヤアオカメムシが10809頭（平成26年332頭）、クサギカメムシが58.5頭（平成26年21.6頭）であった。
- ・県内6か所のフェロモントラップにおける9月1日～20日の合計誘殺数の平均は、269頭（平成26年107頭、平成27年比2.5倍）と平成26年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが122頭（平成26年82.8頭）、ツヤアオカメムシが146頭（平成26年21.7頭）、クサギカメムシが1.0頭（平成26年2.1頭）であった。
- ・ヒノキ球果の着果量（指数）は、県平均7.9（平成26年4.5）と平成26年より多かった。なお、本虫は球果を餌として増殖するため、着果量が多いと新成虫の増殖は助長される。
- ・9月上中旬のヒノキ球果における本虫の平均寄生数/10結果枝は、37.5頭（平成26年6.1頭）と平成26年より多かった（9月としては1996年以降で過去最多）。
- ・9月上中旬のヒノキ球果における本虫の平均吸汁痕数/球果は21.1（平成26年16.2）と平成26年より多かった。なお、本県ではヒノキ球果における吸汁痕数が20に近づくと、本虫がヒノキから離脱し、餌を求めて果樹園に飛来するとされている。9月上中旬時点では20地点のうち6割で平均吸汁痕数が20を超えており（西部・中部が多い）、既にヒノキからの離脱が始まっていると考えられる。
- ・9月上中旬の温州みかん巡回調査では、払い落とし数/10か所は0.5頭（平成26年0.1頭）、9月中旬のかき巡回調査では、同様に1.6頭（平成26年1.2頭）といずれも平成26年より多かった。また、9月上中旬時点では温州みかんでの被害は認められなかったが（平成26年被害果率0.1%）、かきでは被害果率7.6%（平成26年1.2%）と被害が平成26年より多かった。
- ・病虫害防除員からの情報によると、本虫による果樹園への飛来は西部を中心として9月上旬頃から一部のほ場で認められ始め、9月中旬以降は西部・中部での大量飛来も確認されている。
- ・以上を総合的に判断すると、10月の果樹園への飛来数は平成26年より多いと予想される。

防除対策

- ・9月下旬時点では西部を中心として果樹園での大量飛来が確認されている。飛来が確認されていないほ場でも、今後の飛来に最大限の警戒を払う。
- ・静岡県病虫害防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ球果の着果量や球果における寄生数、球果での吸汁痕数、果樹園への秋季以降の飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。
- ・これら最新情報を確認し、本虫の飛来が予想される場合には、ほ場の見回りをこまめに行う。ほ場

で少数でも本虫の発生を確認したら、本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来を招く前に、直ちに薬剤防除を行う。また、周辺ほ場への大量飛来がみられた場合、飛来前の予防的な薬剤散布を心掛ける。なお、本虫の移動範囲は広いと、地域での一斉防除が効果的である。また、ヒノキ・スギ林の隣接地域（特に中山間地）や台風・暴風雨後の園地では、急激に発生が増加する場合があるので注意する。

- ・薬剤防除については、[「静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準」](#)を参照する。なお、薬剤の選択に際しては収穫前日数に注意する。
- ・防除対策については、[「令和8年度注意報第3号（かんきつ、落葉果樹 果樹カメムシ類）」](#)も参照する。

【茶】

＜生育の概況等＞

9月上中旬の巡回調査時では、秋芽生育期であった。

●チャハマキ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、平均寄生虫数 0.02 頭/1.25 m²（平年 0.16 頭/1.25 m²）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生虫数 0.3 頭/1.25 m²）。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、摘採面の平均寄生葉率は 1.7%（平年 2.6%）と平年より少なかった。
- ・天敵のカブリダニ類の発生は、茶園4か所の叩き落とし調査で平均 0.1 頭（平年 0.6 頭）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・既に発生が多い茶園では、整枝後に防除を行う。今後の発生状況をよく観察し、発生が見られたら防除を実施する。

＜その他の病害虫＞

●褐色円星病

- ・夏～秋に感染し緑斑症状を示した葉が、翌春になって落葉を引き起こす。よって、春になってからの防除では手遅れである。今春、多発したほ場で9月以降に殺菌剤を散布していない場合には、10月中旬に1回防除を行っておくと良い。

【トマト】

＜生育の概況等＞

生育はやや早い～遅い傾向で、産地によりばらつきがある。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・9月中旬の東部及び中遠地区での巡回調査では、本病の発生は確認されなかった（平年発病株率5.3％）。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する（菌の生育適温は葉かび病20～25℃、すすかび病26～28℃で、どちらも多湿条件で発病が多くなる）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。なお、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・被害葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・本県では、秋期はすすかび病の発生が多い傾向がある。

●黄化葉巻病

予報の根拠

- ・9月中旬の東部及び中遠地区での巡回調査では、本病の発生は確認されなかった（平年発病株率0.7％）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病を媒介するタバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、タバココナジラミの項を参照すること。
- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。

●タバココナジラミ

予報の根拠

- ・9月中旬の東部及び中遠地区での巡回調査では、コナジラミ類の平均寄生株率は0.8%（平年5.5%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、増殖を助長する。

防除対策

- ・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
- ・成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

【だいこん】

●コナガ

予報の根拠

- ・フェロモントラップ調査における9月1日～20日までの誘殺数は平年並に推移している。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高く、本種の生育適温は22.5～27.5℃のため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ほ場内の発生に注意し、初期防除に努める。

<その他の病害虫>

●軟腐病・黒腐病・黒斑細菌病

- ・高温・多雨の条件で発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生をやや助長する。
- ・生育の衰えは発生を助長するため、排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。特に、葉柄基部から侵入した場合は根部に影響を与え、商品価値を落とすこともあるため注意する。

●モザイク病（アブラムシ類）

- ・モザイク病の発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分するとともに、アブラムシ類の防除を行う。

【ねぎ（白ねぎ）】

<生育の概況等>

生育は平年並～平年より約7日早い。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は7.0%（平年4.7%）と平年より多かった。
- ・9月中旬のネギアザミウマの平均寄生株率は5.8%（平年8.7%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、黒斑病は発生が助長される（黒

斑病菌の分生子の発芽・形成適温 24～27℃、葉枯病多発気温 15～20℃）。

防除対策

- ・本病は多湿条件で多発するため、植え溝の両端に排水用の溝を切るなどして、ほ場排水を良くする。
また、肥料の過不足により発生しやすいため肥培管理を適切に行う。
- ・薬剤防除は、予防散布や発生初期の散布が効果的である。各薬剤の使用回数に注意し防除する。
- ・風ずれやネギアザミウマの食害は本病の発生を助長するため、防風ネットの設置やアザミウマの防除に努める。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は5.8%（平年8.7%）と平年より少なかった。一方、被害程度を示す被害度は、36.4（平年17.3）と平年より高かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年、10月は本種の発生程度が高まる。多発するとネギの生育が遅れるため、発生初期に防除する。
発生が多いほ場では早めに防除を行う。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.0%（平年1.5%）と平年より多かった。
- ・静岡県磐田市（農林技術研究所内）のフェロモントラップによる誘殺数は、9月第1～4半旬の合計で371頭（平年216頭）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ほ場内を観察し、葉に卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）を見つけた場合は、直ちに除去する。
- ・多発ほ場では、定期的に薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.0%（平年34.0%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・本種が多発すると生育が遅れるため、発生が見られるほ場では早めに防除する。

【レタス(非結球レタスを除く)】

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

- ・本病は土壌伝染性のため、常発地では土壌消毒を行う。

- ・本病の発生が確認された地域からは土壌の移動をしない。
- ・発病ほ場で使用した農機具は十分水洗いし、消毒する。

●斑点細菌病

- ・本病は降雨により発病が助長されるため、降雨後はなるべく早く薬剤を散布して予防に努める。
- ・発病葉は摘み取って、ほ場外に持ち出して処分する。

●べと病

- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。特に、育苗期に本病と疑われる症状があった場合や、周辺でべと病が多発している場合など、感染源が多いと思われるほ場では注意する。
- ・育苗期の防除を徹底し、発病株を本ぼに定植しないよう苗を厳選する。
- ・発病葉は摘み取って、ほ場外に持ち出して処分する。

●モザイク病（アブラムシ類）

- ・感染時期が早いほど被害が大きいため、ウイルスを伝搬するアブラムシ類の薬剤防除は、特に育苗期や定植後の生育前半に徹底して行う。
- ・発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。

●ナモグリバエ

- ・常発地域では、育苗期後半または定植時に薬剤を処理する。
- ・定植後は初期発生に注意し、発生を確認した場合は薬剤防除を行う。

●ハスモンヨトウ

- ・【作物全般】ハスモンヨトウの項を参照。

●オオタバコガ

- ・【作物全般】オオタバコガの項を参照。

【いちご】

<生育の概況等>

病虫害防除員の報告によると、苗の生育は平年並～早く推移している。

●炭疽病

予報の根拠

- ・8月上中旬の育苗ほ巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年1.7%）と平年より少なかった。
- ・病虫害防除員の報告によると、9月の発生量は県内主要産地においてやや少ない～やや多く、平年並の産地が多い。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・病原菌の生育適温は28℃前後であり、高温・多湿条件下で多発生しやすい。
- ・発病株からその周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。

- ・発病株は培土も含めて抜き取りほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなど、適切に処理を行ってから処分する。
- ・薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にはほ場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、発病株への散布は行わない。感受性低下の疑われる剤（MBC 殺菌剤（FRAC: 1）、QoI 殺菌剤（FRAC: 11））の散布は避け、薬剤抵抗性リスクの低い保護殺菌剤（FRAC: M1～11）を使用する。
- ・発病後は薬剤による治癒が困難であるため、定期的な防除による予防を心がける。激しい雨や台風など水滴が飛散しやすい状況の前後は重点的に防除を行う。
- ・発病株や発病が疑われる株は定植苗には使用せず、病原を本ほへ持ち込まない。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・8月上中旬の育苗ほ巡回調査では、平均寄生株率は14.2%（平年8.8%）と平年より多かった。
- ・病害虫防除員による報告では、9月の発生量は平年並だった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・寄生が認められた場合は少発生うちに防除する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、事前に防除を徹底し、天敵導入時にはハダニ類の密度が低くなるようにする。ハダニ類が低密度に維持された条件下での天敵放飼が重要である。

<その他の病害虫>

●ハスモンヨトウ

- ・【作物全般】ハスモンヨトウの項を参照。

【作物全般】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・フェロモントラップにおける直近1か月の誘殺数は、静岡市及び御前崎市では平年並～やや少ないが、磐田市では平年より多く推移している。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・初期発生に注意し、若齢幼虫のうちに防除を行う。施設栽培の場合は開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・フェロモントラップ調査における9月の合計誘殺数は、浜松市中央区協和町では平年より多く、浜松市中央区伊左地町では平年よりやや多く推移しており、磐田市富丘では平年並みに推移している。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・本種は幼虫の成長に伴い、植物体へ食入するため、薬剤の防除効果が低下するので、ほ場を観察し早期発見および初期防除に努める。

3 季節予報

● 1か月予報 （東海地方 令和8年9月24日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 9月26日から10月25日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		期間のはじめも降水量が多く、日照時間の少ない状態が続く見込みです。
向こう1か月	天候	天気は数日の周期で変わるでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率50%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率50%です。
2週目	気温	2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率50%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	40	50
1か月	降水量	30	40	30
1か月	日照時間	30	30	40
1週目	気温	10	40	50
2週目	気温	20	40	40
3～4週目	気温	20	30	50

【予報の対象期間】

1か月 : 9月26日（土）～10月25日（日）
 1週目 : 9月26日（土）～10月 2日（金）
 2週目 : 10月 3日（土）～10月 9日（金）
 3～4週目 : 10月10日（土）～10月23日（金）

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
 - ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。
- お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘 678-1
 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
 U R L <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>